



Title	心理動詞と動作動詞の類比的研究：時間的性質を中心
Author(s)	吉永, 尚
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49483
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【11】

氏 名	吉永 (田所) 尚
博士の専攻分野の名称	博士 (言語文化学)
学位記番号	第 22539 号
学位授与年月日	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	心理動詞と動作動詞の類比的研究－時間的性質を中心の一
論文審査委員	(主査) 教授 三原 健一 (副査) 教授 仁田 義雄 教授 小矢野哲夫 教授 杉村 博文 准教授 堀川 智也

論文内容の要旨

本論文は、心理動詞と動作動詞の文法的性質の異同を明らかにし、またその異同は何に起因するかについて考察することを目的としている。

動詞的性質が文法現象に反映されるものに動詞連用形接続がある。用法の違いによって主語の意味役割や選択される動詞にも分類的な相違が見られ、これらには一定の法則がある。本研究で

は各用法の運用形節に選択される動詞の時間的性質を含めた特徴や主語の意味役割を観察し、動詞の接続的機能と時間的性質、動詞分類との関係について明らかにした。

運用形節を主節への従属度の違いにより形態では7分類、マス形節では3分類し用法ごとに文法的振る舞い方を調べ形容詞の運用形接続とも比較し、一定の法則性を導き出した。主要な四つの用法について簡単に述べる。

【付帯用法】従属度が高く無アスペクト動詞は選択されない。「持続」を含意し客体変化を表さないものが選択される。同主語で意味役割の一貫が必要だが形態節に心理動詞が選択された時のみExperiencer（経験者）：Agent（動作主）の組み合わせが許容される。マス形ではこの用法が無い。

【継起用法】付帯用法より従属度が低く、前後節で異主語が許容されるが意味役割の一貫は必要である。前節の事態が終了した後、継起的に後節の事態が起こり、前節には形容詞などの状態性述語は選択されない。また心理動詞などの「～終わる」と共起しない（限界性を含意しない）動詞も選択されない。また心理動詞が選択されると因果解釈で許容される。

【因果用法】継起用法より従属度が低く異主語、異質な意味役割の組み合わせも許容され、前後関係が保証されれば状態性述語など時間的性質の選択制限も無い。運用形節に心理動詞や心理形容詞が選択されると因果解釈されやすい。

【並列用法】従属度は最も低く、前後節が並列的内容であれば主語や意味役割、動詞の性質などには制限が見られない。他の並列成分の並列機能と比べ結束性が低い。心理動詞や心理形容詞が選択されるとやはり因果解釈に傾きやすい。

各用法の文法的特徴を元に樹形図を用いて構造的に考察し、動詞句の支配域内ではアスペクトなどの性質的制約が強く、支配域外では制約が弱いことがわかった。全ての動詞には本質的な時間的性質が焼付けられており、元のアスペクト性は保持したまま主節動詞の時制支配を受け、その時間的関わりにおいて整合性を持つと考えられる。

しかし、心理動詞の文法的振る舞いについて、次の様な疑問点も導き出された。

(1) 従属度の最も高い付帯用法では動詞選択にアスペクト的制限が強く、状態述語は選択されないが、一般的に状態的であるとされる心理動詞が許容され、また事態の完結を要求する継起用法では心理動詞は選択されないのはなぜか。

(2) 同じく付帯用法では意味役割の一貫が必要とされるが、経験者主語と動作主主語という異なる組み合わせが唯一許容されるのはなぜか。

(3) 運用形節に心理動詞や心理形容詞が選択されると因果解釈に傾きやすく、また、因果用法では心理動詞・心理形容詞が多く選択されるのはなぜか。

以上の問題を究明するため心理動詞について時間的性質を中心に考察した。

最初に心理動詞の意味規定を考え、これらの条件に合致するものを意味的（①感情的心理動詞－色々な精神状態、心理的作用を表すもの、②知覚感覚的心理動詞－感覚器官からの刺激により感知される神経作用を表すもの、③思考認識的心理動詞－知的な精神活動を表すもの）に分類し、更にそれらを語構成的（和語起源、漢語起源・派生的、擬態語起源）に下位分類し、それぞれについて項関係や意志性の観点から語彙意味的考察をした。また、心理動詞固有の人称制限についても考察を加えた。

次に心理動詞のアスペクト性について観察した結果、グループ毎に特徴が見られた。

A. 驚く型）心理主体の短期的な心理変化、活動が主要な意味である自動詞。これらは、心理活動の継続を積極的に意味しない。（仰天する、激怒する等）

B. 憶む型）心理主体の比較的長期の心理活動を表す自動詞。かなり長い心理活動の継続を示す。（苦しむ、耐える、集中する等）

C. 信じる型）主体の精神作用・活動が働きかける対象となる要素（～を～に）を必要とし短期長期の心理活動の両方が含まれる。（愛する、考える等）

動詞のアスペクト的分類をめぐっては、金田一(1950)工藤(1995)森山(1988)などがその代表として挙げられるが、いずれも心理動詞と動作動詞との整合性について積極的記述はない。山岡(2000)では述語を文機能により分類し、本研究でいう心理動詞を感情動詞として位置付け、アスペクト的分類には限界があるとして感情表出・感情描写などの文機能による分類を試みている。三原

(2000b)では、ES型心理動詞を動詞分類的観点から分析整理し、消去法的に活動動詞であるとし、三原(2004)では心理動詞を含む動詞全体の限界的アスペクト性を記述的統語的に分析している。

本研究では、考察の結果心理動詞は本来的に外的動作動詞と共に動作動詞を具有し、動詞分類において、時間的性質の点で分別される必要はないという立場を取り、前述の心理動詞のアスペクト性に関する疑問点を解決した。

(1)について、殆ど全ての心理動詞は時間的な副詞（「長い間」や「瞬間」など）と共に起きて、何らかの心理的状態・活動を表しうる点で、状態動詞とは本質的に異なっていると考えられる。状態動詞とは共起しない「～し始める」の複合動詞化テストでは、

- ① アルバイトをやめて、一週間で、もうお金に困り始めた。
- ② 嫌いな曲の演奏が始まってすぐに、頭がガンガンし始めた。

の様に、はっきりとした開始限界を表す。

付帯用法ではアスペクト性を示すもののみ選択され、これは心理動詞が選択されることと矛盾していない。また、心理動詞では、心理活動・変化が瞬間的であっても結果存続の含意はなく変化動詞とは異質であると言える。次のテストのように永続的な結果存続とは結びつかない。従つて事態の完結性が要求される継起用法には選択されないのである。

- ③ *悩み終わる、困り終わる（いずれも不可）OK読み終わる、塗り終わる（限界的な要素がある時許容）

- ④ *一度困ると元には戻らない、一度喜ぶと元には戻らない（いずれも不可）

OK一度溶けると元には戻らない、一度外れると元には戻らない

(2)については、心理動詞の非状態性や非結果性による動作動詞の性質により、心理動詞主語である経験者と動作動詞主語である動作主は何らかの意味役割の類似性を持つという事実の表れであると思われる。

また、心理動詞のアスペクト性を考える際に時間的長短の意味要素が大きく関わっていると考えられ、この意味要素を便宜的に「持続性」(CONTINUITY)と呼ぶことにした。（「持続的」(CONTINUOUS)という意味素性を表現する時には、これに+記号を付けて表現する）

「持続性」とは、心理動詞の場合は心理的作用・活動において持続の含意の強弱を意味する。動作結果の残存は関与せずテイル形解釈などの文法的アスペクトに影響を与える、語彙に組み込まれた時間的長短のみに関する性質とする。この性質は動作動詞一般についても敷衍できる性質であると思われる。

心理動詞で「持続性」の強いものは、期間副詞を附加したテイル形で進行解釈でき、反対に「持続性」の弱いものはこの解釈では許容されず、テイル形を持たないか、またはテイル形の用法の一つである「事態の成立」の意味解釈になる。これは動作動詞のテイル形にも適用される。

「持続性」の強いものに「悩む、ぼーっとする」などが挙げられ「持続性」の弱いものに「ひらめく、激怒する」など、中間的なものに「困る」などが挙げられる。動作動詞では「持続性」の強いものに「読む、泳ぐ」、「持続性」の弱いものに「叩く、目撃する」など、中間的なものに「拭く」などが挙げられる。これらの点に関して動作動詞との共通点が見られ、アスペクト性において類似していることがわかる。

また、心理動詞を語彙概念構造で表すと次の様になるであろう。

< A. 驚く型、B. 憶む型自動詞 > < C. 信じる型他動詞 >

[x EXPERIENCE], (±CONTINUOUS) [x ACT y], (±CONTINUOUS)
(ACT) (EXPERIENCE)

いずれも下位事象において内項を含まず限界性（主体変化、客体変化）を意味しないということが言える。

(3)については、動詞の時間的性質とは別のレベルの問題である視点がらみの問題が関わっていると思われ、視点を反射する成分「自分」を用いて、心理表現文における文法現象を観察した結果、次の様なことが明らかになった。

視点は経験者主語に優先的に置かれるので、因果文などの視点的統一が必要な文では心理述語が多く、また心理述語が選択されると因果解釈に傾きやすい。

この現象は中国語の対応成分「自己」との対照においても見られ心理表現文での視点の卓立性

は言語共通であることがわかったが、心理表現での人称制限は日本語固有の統語的制約であり中国語では観察されない。この問題には表現差と共に事象認知に関わる相違があると思われ、独語の人称観察などにより事象認知の相違について考察した結果、日本語には視点固定的な認知傾向が見られることがわかり、これが人称制限などの文法現象に関わっていることが推測された。

結論として、Experiencer（経験者）の視点の優位性に関わる文法現象は心理動詞の時間的性質とは関与せず心理世界の事象を表すという性質によるものであり、心理動詞の特殊性と見なされる人称制限も時間的性質とは関わりのないものであり、日本語の表現習慣、事象認知的な問題に関わるものであるということが分かった。

従って心理動詞と動作動詞は時間的性質において同質であり、文法現象における両者の相違は心理世界の事象と物理世界の事象という相違に由来し、また日本語特有の事象認知と関わっていると思われる。

本研究を通じて心理動詞と動作動詞のアスペクト的な同質性を提唱したいと思う。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、心理動詞と動作動詞の文法的性質の異同を明らかにし、また、その異同が何に起因するかについて考察することを目的としている。全8章のうち、第1章から第5章までが主として動詞連用形・テ形に関する分析であり、第6章から第8章までが心理動詞に関する分析となっている。後半章で心理動詞が特に取り上げられているのは、前半章の分析で抽出された原則から逸脱する特質が心理動詞において観察されるからである。

論文審査は、まず、申請者による論文全体のまとめを20分程行い、次いで、主査から30分弱質疑応答を行った後、各審査担当者からの質疑応答に移った。審査を要した時間は概ね120分程度であった。依拠する枠組みや方法論を含め、分析の多くが受け入れ難いとする担当者もあったが、これは、主として文法研究に対する立場の違いに起因するものかと思われる。全体的には、各担当者から出された質問に対して、概ね妥当な受け答えがなされたと言える。

日本語における連用形・テ形についてはこれまでにも多くの研究がなされているが、本博士論文では、付帯用法・継起用法・因果用法・並列用法のそれぞれの用法に関して、用いることが出来る動詞と出来ない動詞を綿密に検証し、統語的テストを適用することにより動詞分類の中での位置付けを明確にした点が、まず高く評価される。また、心理動詞については、包括的な研究があまりなされてこなかった状況において、心理動詞の位置付けを明確化した点、及び、中国語のデータも援用しつつ、視点の観点からその文法的振る舞いを明らかにした点が高く評価される。方法論については、主として体系的な意味記述を指導原理とするものであるが、随所に現代言語学の成果が盛り込まれており、幾つかの箇所では樹形図を用いた構造的分析もなされている。また、本博士論文を基盤とした研究書が、和泉書院から既に刊行されていることも付記しておきたい。

もちろん、完璧な論文というものは極めて稀であるので、本博士論文についても分析が不十分であると思われる点が指摘された。大きな点に関する指摘は以下のようなものであった。まず、論文の構成として、前半と後半が分離している印象があるので、もっと有機的な繋がりを心がけるべきであるという指摘があった。また、理論言語学（特に生成文法理論）における統語的分析を批判している箇所が幾つかあり、生成文法を枠組みとする博士論文ではないことを考慮しても、過激すべき文献で抜け落ちているものがあることを含め、批判としては不十分であるという指摘もあった。さらに、本博士論文では「アスペクト」が重要な概念の一つであるが、本博士論文が依拠する以外の枠組みにおけるアスペクト研究の知見に対して、十分な敬意が払われているとは言えないという指摘もなされた。中国語の分析に関しても、総論は賛成だが、各論については賛成し難いものがあるとされた。また、中国語学の文献数が少ないことや、文法性判断に問題がある文例などが存在することも指摘された。

上で述べたように、分析が不十分であると思われる点もあるが、全体に亘って動詞分類を総体的に見据えた上で綿密な論証を行っており、博士論文として十分な評価に値すると考えられる。以上のことを総合し、論文審査担当者間で慎重な協議を行った結果、論文博士の学位に値する業績であると結論付けに至った。